

小・中・高一貫校における外国語教育の位置づけ

木 村 侑香子 (聖ウルスラ学院英智小・中学校)

1. はじめに

本研究では、中等教育におけるより高度な学習を可能にするための、初等英語教育の在り方について研究する。

初等英語教育において、英語の言語感覚及び、文処理能力の基盤を育むことが、中等教育における英語学習をよりスムーズに行うことにつながるのではないかと考える。そこで、本年度は、小学生に英語言語感覚を育成するために、「能動的描写トレーニング」と称したカリキュラムを開発し、実践した。その手立てと実践、及び成果を報告する。

2. 能動的描写トレーニングとは

能動的自由描写トレーニングは、児童に絵を自由に表現させ続けることで様々な文法事項を能動的に習得させ、英語の表現力をつけていく学習法である。英文で絵を描写する訓練 (Output) を積みながら、互いの発表を集中して聞きとる (Input) 訓練をすることで、英語の文構造を理解し、目的に応じて使えるように訓練していく。

まず、初期の段階では、同一の絵を数ヶ月間かけて詳細に描写させていく。その中で、基本的な文法事項 (be 動詞、動詞、形容詞、副詞、冠詞、前置詞等) を段階的に習得させ使えるようにしていく。さらに、こういった基本的な英文法を用いた簡単な文での描写の訓練を積むことで、Output の練習量を確保し、基本的な英文を自然にすらすら使えるようにしていくことを目指す。例えば、描写トレーニングを始めた頃、「Papa is on a bed」というシンプルな文しか作れなかった児童達が、数週間後には、「Papa is on a right pink bed」というより詳しい文が作れるようになる。さらに、そこに動詞を導入することで、「Papa sits on the right pink bed.」という、動きを表す文が作れるようになる。このように、数ヶ月かけて様々な文法事項 (be 動詞、動詞、形容詞、副詞、冠詞、前置詞等) を習得していくことで、数ヶ月後には「Papa sits, reads a lion book and smiles to his daughter happily on the right pink fish bed.」等の、さらに詳細な文を自分で作れるようになっていくのである。

ある程度、文法の基礎ができ、英文での描写が抵抗なくできるようになったら、描写する絵のジャンルを様々に変えていき、さまざまな場面で応用可能な英語力を育成していく。

能動的自由描写トレーニングを簡単に表現すれば、「絵を自由に英文で描写させ続ける」だけのトレーニングである。しかし、そのトレーニングの繰り返しにより、「より、ユニークで高度な描写をしたい」という児童の自然な知的好奇心を引き出し、英語での描写力を挙げていくプログラムである。

3. 能動的描写トレーニングが目指すもの

能動的描写トレーニングが目指すものは、基本的な文構造力 (文処理能力)、言語運用能力、自律学習力という、3つの能力を培うことである。これは、児童が自分の能力や興味にあわせて、英語学習を展開していく上で必要になる能力である。また、英語への興味を持続させ、継続的に学習を続けていく力にも

つながると考える。

能動的自由描写トレーニングにおいて、身につけたい力の1つは、児童に英文法への理解に基づいた、英語文の構造力を身につけることである。例えば、英語の文で絵を描写する際、児童は既習の言語知識を駆使し、頭の中で単語を組み立てながら、英文を作っていくことになる。であるならば、単純な文での描写活動を行い、この「頭の中で単語を組み立てる」訓練を積むことが、英語文の構造力の向上につながるのではないかと考える。従って、初期の能動的自由描写トレーニングにおいては、簡単な文法知識を使った描写活動を繰り返すことにより、「頭の中で単語を組み立てる」訓練を繰り返し、簡単な文でなら自然にすらすら話せるようにしていく。これを繰り返して行くことで段階的に表現の幅を増やし、自然にすらすら言える文を増やしていくのが、このトレーニングの目標の1つである。

簡単な英文を自然に作れるようになり、ある程度の言語知識もついてきたら、今度は英語を目的に応じて使いこなせるようにしていく。英語運用能力の育成である。英語運用能力とは、実際に目的をもって英語を使用する訓練を積むことで習得される、さまざまな目的に応じた英語表現力である。とりわけ、能動的自由描写トレーニングで重要視している英語運用力は、「自分の意見を論理的に相手に伝える能力」である。英語は、もともと“Because”や“I think”が日常的に使われ、論理的な構造をもっている。そのため、英語の話せる国際的な人材を育成するためには、こういった英語の構造を理解し、論理的に相手を説得させる力も身につけなければならない。このトレーニングでは、その英語の論理的な構造を生かし、英語で話し合い活動ができるようになることを目指す。その手法として、英語での絵の分析に挑戦する。絵の分析の具体的な手法については、「指導の手立て―課題追究1」の中で説明する。

能動的描写トレーニングの最終ゴールは、independent learner（自立学習者）を育成することである。自分の学習に責任を持ち、自分の能力や興味関心に合わせて、英語の学習を展開していく力をつけていきたい。

例えば、前述の絵の分析は、英語学習への動機づけにつながる。絵を注意深く読み取り、分析し、何かを発見したとき、それを説明したいと思うことが英語学習への動機づけになるのである。例えば、算数の式の答えを発見した児童が、答えを言わずにはいられないように、絵の分析から何かを発見した児童は、それを説明したくてうずうずするだろう。そこに、英語という道具を与えてやれば、児童は水を得た魚のように、嬉々として英語を話した。それこそが、英語で話すことの動機づけになるのである。このように、絵の分析により、児童の知的好奇心を刺激することで、児童の能動的学習意欲を引き出していきたい。

ただ闇雲に英語が話せるようになるのではなく、情報をきちんと捕らえ、分析し、自分の意見を論理的に説明できるような英語力を、本校の児童には身につけて行ってほしい。そして、その知的好奇心に導かれながら、自律的に学習していける力をつけていきたい。

4. 指導の手立て

課題提示 【描写教材：“Storytime in the Bedroom”(Longman Children’s Picture Dictionary).】

1枚の絵を数ヶ月間かけて描写していくことで、描写のための英語の基礎を徹底的に習得させていく。

課題追求1 【描写教材：“Storytime in the Bedroom”(Longman Children’s Picture Dictionary).】

“Evening in the Livingroom”(Longman Children’s Picture Dictionary).】

課題提示で学習した言語材料に加えて、「動詞」を導入することにより、さらに描写の幅を広げていく。また、「The Most Commonly Used 100 words」を導入することで、使用できる動詞の幅を広げると共に、「使いたい動詞を、表で調べる。」という、辞書引きの土台となる訓練を行う。

課題追求2 【描写教材：“Clean Up the Kitchen”(Longman Children’s Picture Dictionary).他.】

数週間おきに描写する絵を変えていくことで、語彙力の幅を広げ、描写の応用力をつけていく。引き続き、描写の練習を繰り返すことで、練習量に基づいた表現力の発達を促す。

課題追究 1 【描写教材：“A Living Room” (Oxford Picture Dictionary).

“In the Bathroom”(The Heinle Picture Dictionary for Children) 他.]

毎時間、描写する絵を変えていくことで、描写の応用力をつけ、臨機応変に、短期間の準備で描写をする訓練を行う。そうすることで、実際のコミュニケーションにより近い状況を作る。

また、論理的な表現力をつけるために、絵の分析にも挑戦する。絵の分析とは、季節、時間、場所、などのテーマのもとに、その絵を分析していくことである。教師は、“What season is it?”, “Where is it?”などの質問で児童の英文による分析を促す。児童は、“I think it’s summer, because a boy wears short sleeves.” などというように、実際の絵から論拠を探し出しながら自分の考えを英文で論術する。描写で培った英語力を応用しながら、論理的に自分の意見を述べる訓練を積んでいく。

課題追究 2 【描写教材：Various Pictures】

さらに様々な場面や状況の絵を描写・分析していくことで、表現力、分析力、説明力をつけていく。また、宿題において、児童の好きな絵や写真、絵本を選ばせ、描写・分析させていく。それにより、それぞれの興味、関心に合った分野での表現・分析力を磨く。

段階	月	学習内容	児童が実際に作った文の例
課題提示	5 6 7	動かないものの簡単な描写 (描写のための基本的な言語材料の習得) ・冠詞 (a / the)、be 動詞 (is / are)、前置詞 (in / on / by / under / behind / in front of) 形容詞	・ A computer <u>is on</u> a desk. ・ Toys <u>are in the</u> bookshelf. ・ Papa is on a <u>right pink</u> bed.
課題追究 1	8 9	動くものの描写 ・動詞の使い方の練習(sit/read/stand/wear/lay/smile/listen) ・Most commonly used 100 verbs の導入	・ Nate <u>draws</u> a picture. ・ Papa <u>cleans</u> the floor. ・ A girl <u>uses</u> a computer.
課題追究 2	10	より詳細な描写 副詞(happily sadly curiously)の使い方の練習	・ Nate sings happily. ・ Yukako cries sadly. ・ Papa cleans the floor happily.
		より詳細な描写の応用 ・動詞、副詞、形容詞を組み合わせた詳細描写の学習	・ Grandma sits , listens to a CD, dances and smiles happily on a green and red colorful big check sofa .
課題追究 1	11 12	様々な絵の描写 ・初見の絵を既習表現を応用して描写する。 絵の分析 ・絵の描写で習得した表現の応用 ・絵から読み取った情報を、分析する。 ・分析した内容を、適切な根拠を示して話す。	・ A man wears pink apron and cuts bread. ・ I think it’s a living room, because it has a big TV. ・ I think it’s spring, because outside is green.
課題追究 2	1 2 3	様々な絵の描写・分析 ・様々な場面や状況の絵の描写・分析 ・自分の興味のある分野の絵・写真の描写・分析 ・絵をもとにした物語の作成	・ I think it’s summer, because many children are in the swimming pool. ・ Hatoyama and Obama are happy! ・ A boy wears purple jacket and a boy wears brown jacket make a big snowman with a colorful scarf

5. 指導上の留意点／効果的だった指導法

リスニングの指導について

能動的自由描写トレーニングは、児童に絵の描写をさせていく Output 中心の学習方法である反面、リスニング力の習得も重視している。

このトレーニングでは、児童が絵の描写を発表する際は、必ず全員がお互いの発表を注意深く聞き合うことを徹底させた。具体的には、発表者が描写した絵の個所を、クラスメート全員に指差し確認させた。クラスメートの英文を聞き取り、理解するだけでなく、それを視覚的に確認することを大切に行ってきた。5月より描写トレーニングを繰り返し行う中で、注意深く聞くことを徹底して行ってきたことによって、かなりの量のインプットが行われた。その成果については、成果（児童の成長の軌跡）で報告する。

文法概念の習得について

文法概念を4年生に習得させる際に重要にしたのが、体と感覚で体験的に習得させることである。

絵を正確な文で描写・分析していくにあたり、英文法の基礎を児童に習得させることは必要不可欠である。しかし、10歳の児童に英文法を習得させる際、中学生に行うように英文法を説明して、理解させることはかえって混乱を招く。そこで、能動的自由描写トレーニングでは、英文法は、体と感覚で体験的に習得させることを徹底した。その上で、描写活動の中で繰り返し使用することによって、英文法の定着を図ったためである。

では、英文法を体と感覚で体験的に習得させるのは、どういうことか。1例を以下に挙げる。

前置詞 (in /on /under /by /behind /between /in front of) と be 動詞 (is are) の習得 (5月)

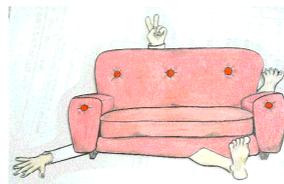
実際の描写トレーニングを開始するにあたり、前置詞と be 動詞を以下のような手順で習得させた。

①手を使って前置詞の概念を習得：in on under by by in in on ♪ というように、リズムで机の上や横、下を叩く。② Total Physical Response: Please sit **under** the desk. Please stand **on** the chair. など、前置詞を体で体験させる。③文房具積み木：①の応用形。A hand **is** on a desk ♪. Hands **are** under the desk ♪. とリズムカルに言っていき、机を A hand (片手) か hands (両手) で叩かせる。④文房具積み木：Pen cases **are** on a dictionary. A dictionary **is** on the dictionaries. と、文房具で積み木を作らせる。児童は辞書や筆入れは1つずつしか持っていない。そのため、クラスメートと協力することで、are の概念を習得させた。

番外編：描写トレーニング開始後、児童の描写の中に、A sofa is on a boy.

のような、主語と述語が逆の文が頻出したことがあった。そこで、写真1を見せることで、その文への違和感を与え、ユーモアでその概念を習得させた。

写真1



読みの指導

英語の音だけに頼るのではなく、聞いたり話したりした英文を、文字で視覚的にとらえることも重要視した。そのため、毎時間授業の最初の3分間を読みの時間にし、英文を音読させた。その際、タイマーを使って30秒以内に何ワード音読できるかを競うことで、短時間で集中して英文を読む訓練を積んだ。また、音読する英文も、授業のテーマになる構文を盛り込むことで、英語の音のリズムをとらえることにもつなげた。

また、7月以降、児童の描写の英文が複雑化してきたからは、児童の作る英文を、黒板や模造紙に板書していった。複雑な英文を文字にすることにより、文構造への理解を促した。この、読みの指導は、夏休み以降、ライティングの力へとつながっていった。ノートに級友の作る英文を書きとり、参考にする児童が増えてきたのである。この頃の描写活動において、児童は、より複雑でユニークな文を競い合って作り合うようになっていった。この、“より優れた英文を作りたい”という児童の思いが、児童にライティングを促したのである。

児童に英語文構造を効果的に理解させるうえで、英文を文字で視覚的にも確認できるようにしていくことが、非常に重要であるといえる。

6. 成果（児童の成長の軌跡）

能動的描写トレーニングによる児童の英語力の変化を観察するため、実際の授業をビデオで記録した。資料1～3は、能動的描写トレーニング、それぞれ、8時間目、26時間目、53時間目の授業における、児童の発言を打ち出したものである。ここにその分析結果を報告する。

能動的自由描写トレーニング 8時間目（6月） 授業中の児童の発言の分析

描写トレーニング開始8時間目。同じ絵を描写し続けたことで、ほとんどの児童が、文で絵を描写することが抵抗なくできるようになってきている。ほとんどの児童が、単語レベルでの描写しかできなかった4月当初のことを考えると、これは大きな進歩であるといえる。

しかし、単数の“A”が抜けたり、“is”と“are”を混同したりと、基本的なミスはみられる。折にふれて確認をしていくことで定着させている。こういった文法上の不安定さは、描写トレーニングの練習量をこなすことで、感覚で身につけさせていく必要がある。この頃使用されていた前置詞は、in/on/byに限られており、そのほかの前置詞を使う児童は少なかった。このことから、児童は、確実に習得した単語を繰り返し使うことで、それぞれのペースで英文を作る感覚を身につけていっていると考えられる。

能動的自由描写トレーニング 26時間目（9月） 授業中の児童の発言の分析

3か月近く同じ絵を描写する学習を繰り返し行ってきたことで、be動詞、単数／複数等の文法概念にも、抵抗なく順応し始めていて、英語の文で表現することにも慣れてきている。まさしく、英語の基礎の定着が見られ始めているといえるだろう。さらに、この頃から、「絵から読み取ったものを、できるだけ詳しく描写したい」という意欲がみられるようになった。多くの児童が、競うように前置詞や、形容詞、動詞を使った英文作りを応用し、複雑に文を構成するようになってきている。中には、**A boy stand and...wears purple pajamas on the yellow floor.**などの、英文法を使い構成し、複雑な長文をリハーサルなしで言える児童も出てきた。また、たくさんの単語をつないで文を作ることに意欲がわき、英文作りを、楽しみ始めている。

リスニング力の定着

リスニング力の定着も、この頃から見られ始めた。指導の留意点でも述べた通り、能動的描写トレーニングは、リスニング力の向上にも力を入れている。児童が授業中に発表する際、発表者の描写を、必ずクラスの全員に指差し確認させ、リスニング力の定着とその評価を行ってきた。そのリスニング確認において、ほとんどの児童が正確に発表者の描写を聞き取り、理解することができていたという結果を見ることができた。このことから、この学習方法によって、描写力以上に、聞き取りの力をつけていくことができる、ということが分かってきた。

インプットからくるアウトプットの高度化

また、このリスニング学習は、児童の作る英文にも良い影響を及ぼした。級友の作る英文を繰り返し聞き続けたことで、聞き取った英文を応用し、自分の描写の表現の幅を広げていく姿がこの頃から見られ始めた。級友が作る描写文を聞き続けることで、リスニング教材や教師が話す例文よりも、非常に身近で濃厚なインプット効果をもたらしたのである。

言語学者の白井恭弘氏は、その著書の中で、“言語習得に必要な最低条件は「インプット」＋「アウトプットの必要性」である”と述べている。つまり、理解可能なリスニング（インプット）を確保しながら、実際に英語で話す経験をさせることが、言語習得には必要であるという。それは、ある程度のインプット量を確保しながら、英語を話し、英語の文を頭の中で構成していく経験を積むことで、英語は効果的に習得されていくのである。

能動的描写トレーニングは、描写の表現力育成に重点を置きながらも、互いの発表を集中して聞き取る訓練を積ませた。これが、児童の発表における、複雑な文構成の力へとつながったのであろう。

ライティングの開始

また、この頃から、級友の発表した良い描写を、ノートに書き取る姿が見られ始めた。この頃は、「早読みチャート」などで、短文を読む指導は行っていたが、「書く」という指導は、単語レベルでしか行っていなかった。しかし、「よりよい複雑な文を作りたい」という思いから、級友の優秀な描写の文を、ノートに書き写す児童が多かった。児童の、より面白い文を作りたいという向上心が、自然なライティングへの導入とつながったのである。

習熟度について

児童は、それぞれの習熟度に合わせて学習を深めていた。描写トレーニングが進むにつれて、多くの児童が、非常に複雑な文を作るようになってきた。その反面、シンプルな文での描写を続けている児童もいた。こういった、Slow Learner も、同じ絵を繰り返し描写することにより、感覚をつかみ始めている。例えば A fan is on a bookcase というシンプルな文を繰り返し作っていた児童が、練習を重ねるうちに、A lamp is on a bookcase, A clock is on a bookcase というような応用形の文を作れるようになっていった。さらに 練習量を重ねることにより、A pink fan is on a bookcase. という形の文も作れるようになっていった。ゆっくりではあるが、着実に、英語文の構造を感覚で理解し始めている。このことから、能動的描写トレーニングは、さまざまな習熟度の児童が同時に学習を進展させていく上においても、有用な学習方法といえるだろう。

能動的自由描写トレーニング開始 53時間目 授業中の児童の発言の分析

語彙も増え、自信を持って絵を描写できるようになってきた。また、描写で使われる英文や語彙も、多様化し、さまざまな文が作れるようになってきた。さらに、ただやみくもに絵を描写するだけでなく、読み取った情報から、必要な情報を選び、目的に合わせて描写する姿が見られ始めた。

リスニング力の向上

複雑な英文を聞き取る力も、少しずつついてきている。児童の描写で使われる英文は、さらに、多様かつ複雑に変化していったが、それでもかなりの正確さで、英文の聞き取りができるようになってきていた。児童は、長い文の中から、必要な単語を聞き取り、推測しながら、内容を理解できるようになってきたのである。また、級友の英文が聞きとれなかった場合も、“One more time” と、繰り返し聞き返し、聞き取ろうという姿勢が見られた。あきらめるのではなく、一生懸命に推測し、聞き返し、理解しようという姿が見られ始めた。

Input から来る、文処理能力の高度化

この頃になると、進行形や分詞を用いて描写をする児童も出始め、児童の描写活動における、文の構造は、複雑化していった。これらの表現は、教師が教えたわけではない。描写を発表し合い、聞き合ううちに、自然に広まっていったのである。このことから、常にリスニングをしながら、描写活動を繰り返したことで、文を処理する力が、ついてきていることがうかがえる。

たとえば、この頃の授業での描写の発展例を紹介する。授業中に児童が、“A girl wear a pink shirt is on a sofa.” という文を作ったことがあった。A girl wear a pink shirt という情報と、A girl is on a sofa という情報を、1つの文の中で表現しようとしたらしい。これを、A girl **【wearing a pink shirt】** is on a sofa. と修正した上で板書し、「これで、**【ピンクのシャツを着ている】**女の子が、ソファの上にいる」という意味になることを、児童につたえ、それ以上の文法上の説明を行わなかった。しかし、この分詞の文が、「よりよい複雑な文を作りたい」という児童の好奇心をとらえ、同じ時間中に、複数の児童が、分詞の構文を使った文を発表した。

このように、まだ習っていない構文の構造やイディオムなどを、リスニングの中で自然にとらえ、output の中に活かすことができるようになってきた。英語の文処理が自然に行われるようになってきたといえる。

これは、自分で文章を作りながらも、級友の英語を聞き続けたことの効果であろう。

英語運用能力の向上

描写トレーニングで培った描写力を応用して、目的に応じた表現ができるようになってきた。授業の最後に行った10枚の絵の中から、児童同士でヒントを出しながら、1枚の絵を当てる【描写ゲーム】では、他の9枚の絵と比較しながら、該当の絵の特徴をとらえ、効率のよいヒントを作れることができていた。このことから、描写トレーニングにより、複雑な文を作る訓練を積んだことで、それを目的に応じて使い分けられるようになってきていることが伺える。

簡単な話し合い活動の開始

描写活動で培った表現力を応用し、絵の分析ができるようになってきている。教師の“What season is it?”（この絵の季節は何ですか？）という質問に対し、**I think it's Summer, because a man and a boy wears short pants**（僕は、これは夏の絵だと思います。なぜなら、男の人と男の子が短パンをはいているからです。）”というように、絵から読み取ったことを論理的に表現する姿も見られ始めた。また、この発言に対して、“**I think it's Fall, because of the fireplace and short pants.**（私はこれは、秋だと思う。暖炉と短パンがその理由です）”という反対意見を述べる児童も出てきた。そこから、“**I think it's spring, because a fire is in a fireplace.**（私は、これは、春だと思う。なぜなら、暖炉に火が灯っているから”、“**I think it's spring, because outside is green**（私は、これは春だと思う。なぜなら外が緑だから）”という発言へと発展した。まだまだ不完全な英語ではあるが、教師の介助を必要としながらも、自分の知り得る英語を駆使して、簡単な話し合い活動ができるようになってきている。

また、ここからは、不完全な英語でありながらも、自分の意見を必死に相手に伝えようとしている姿もうかがえる。これは、絵の分析により発見したことを相手に伝えたいという思いが、英語への不安に勝っていることの表れである。もちろん、英語のクラスである以上、正確な英文を作る訓練も積んでいく必要がある。それと同時に、自分のもつ英語力を駆使して、自分の意見を相手に伝える姿勢も大事に育んでいきたい。

自信をもって英語で発表する力

この授業では、公開研究会ということで、全国から大勢の先生方が、教室を取り囲む中で、ほぼ全員の児童が自分の発見を英文で述べることができた。時間の関係で、一人最大3回程度しか発表ができなかったが、描写や分析においても、教師の質問に対して、常に多くの児童が挙手をしている。英語での描写・分析活動で、自分の発見を英文で述べることに、自信をもって取り組んでいることがうかがえる。

7. まとめ

能動的自由描写トレーニングにおける最大の成果は、児童に自律学習力が付いてきたことである。冬休みの宿題で、児童に「自分な好きな絵や絵本を、描写／分析してくる」という宿題を出した。児童はそれぞれの興味にあった絵を選び、思い思いに描写／分析をしてきた。中には、政治的な写真を描写してくる児童や、絵本の絵を深く分析してくる児童、ひいては、絵を見ながら一つの物語を完成してくる児童まで現れ始めた。ここから、児童は、めいめいに自分の興味のある分野で、英語表現活動を発展させ、楽しみ始めていることが伺える。

また、英語表現活動を楽しめるということは、それだけの言語知識と、言語運用能力がついたことの表れである。英語で描写し、分析することをひたすら繰り返したことにより、児童は英語の基礎力を着実につけてきたのである。また、スピーキング、リスニング、リーディング、ライティングといった4技能すべての、総合的な英語の力をつけてきたことも、能動的自由描写トレーニングの大きな効果である。。

しかし、課題はある。自分の意思を英語で伝えようとするあまりに、不自然な英語や、カタカナ英語的な発音をする児童が出始めてしまった。また、児童の描写 output 活動を中心に進めていく能動的自由描写トレーニングでは、自然な英語の input が不足している。このことも、発音や文の不自然さの一因であ

ろう。

そこで、次年度は、英語の詩や物語の分析にも挑戦する。本年度の自由描写トレーニングにより、ある程度の文処理能力と読みの力が付いてきた児童たちなので、質の高い詩や物語に触れることで、効率のよいインプットとさらなる文処理能力の向上が見られるのではないかと期待する。また、分析した詩や物語を音読し、表現豊かに暗唱していくことで、自然な英語のリズムと発音、表現力を磨いていきたい。

※早期の英語教育が中等教育後期（高校）段階での複言語教育に及ぼす影響を検証してみたいというのが当初の目標であるが、これは単年度の研究では達成は難しい。2009年度段階として、宮城県内における複言語教育、特にフランス語教育の実施校に対し、その履修人数、履修形態、および単位数などの調査を実施した。これは2004年度に行われた調査に引き続くものである。結果は総履修者数が約1.5倍の伸びを示す一方で、2004年度には開設されていた公立4校すべてで、フランス語教育が停止されている実態を示した。来るべき日本の多文化共生時代への準備として重要なこの複言語教育への努力が、公教育現場では軽視されているのではないか。一方、1.5倍増加は私立開設校数が3から5校へ、183人から420人への増加によるものであった。

参考文献

白井 恭弘、2008、『外国語学習の科学 ― 第二言語習得論とは何か』、岩波新書